



あっさり黙示録

#32 6番目の宣告—大艱難時代の目的

「史上最大のリバイバル」

黙示録 14章

東住吉キリスト集会 高原 剛一郎 氏



お元気ですか。高原剛一郎です。ウクライナ戦争開始から、もうすぐ7か月になろうとしています。ウクライナでキリストの福音を伝えている宣教師たちから、私に毎週のようにレポートが入って来ますが、彼らは戦争が始まってからウクライナに入ったのではなく、戦争が始まるはるか以前から活動しているんです。

こういうことを聞くと、ある方々は「ウクライナってキリスト教国じゃないの？ キリスト教国の人たちに、なぜキリスト教を伝えるの？」と不思議に思うかもしれません。確かにウクライナにはウクライナ正教という伝統的な宗教がありますが、だからといって、個人的にキリストを信じているのとはまた違うんですね。

日本でもほとんどの人たちが仏教徒と言われています。しかし、本当の意味での仏教徒かという、そう言えないのではないかと思います。大抵の人は仏教の経典を読んだことがないし、仏教の修行をしたことがないし、仏教の教えを正確に理解した上で信じているというわけでもないからです。代々家から伝わって来た伝統なので、それを受け継いでいるというだけのことなんですよ。

それと同じように、キリスト教文化圏の中では、キリスト教は文化として1つの括りになっていて、家の宗教みたいにキリスト教徒とと思っている人がいるかもしれません。しかし、聖書が語っている救いは、本当の意味でイエス・キリストと個人的に出会って、救い主として受け入れることなんですね。なので、ウクライナにもキリストを知らない人がたくさんいるので福音を伝えているのです。

そんな中、戦争の前と後では明確な違いがあると、あらゆるレポートが教えてくれています。戦争前は教会や集会にほとんど行かなかった人たちが、この戦争のさなかに殺到し、聖書そのものを読むようになり、聖書についての質問が熱く交わされるようになりました。そして、イエス・キリストを信じて洗礼を受ける人たちが続々と起こされているのです。

なぜ戦争が始まったらそのようになったのでしょうか。戦争のような危機的状況にない時、平穏無事で順調な時、自分の人生は自分の力でコントロールできると考えているフシがあります。しかし、戦争のように個人の手でどうしようもできない事が起こった時初めて、自分の無力さや大いなる力の介入の必要性を感じ、また、いつ死ぬかも分からない危機的状況の中で、必ず来る死に対する準備が出来ていなかったということを感じ痛感するようになるからだと思います。

それは艱難時代についても言えるんですね。艱難時代は人類歴史のどの時代よりも、最も多くの人々がイエス・キリストを信じる時代でもあるんです。

というのは、最も大きな困難が人類に降りかかる期間だからです。

黙示録 14 章には 7 つの宣言があります。7 年間の艱難時代の後半 3 年半、反キリストが自らを神と主張し、本性を顕わにする非常に困難な時代のことを 7 つの宣言で預言しているのです。今日は 6 番目の宣言です。

14 また私は見た。すると見よ。白い雲が起こり、その雲の上に人の子のような方が座っておられた。その頭には金の冠、手には鋭い鎌があった。

白い雲が起こり。これはシェキナー。神の臨在を肉眼で分かる“しるし”として啓示されたのです。神の臨在の現象である雲の上に人の子のような方が座っておられた。これはイエス・キリストです。人の子のような方はメシア、すなわちキリストの別名・称号なんです。

ダニエル書に出て来ました。黙示録 1 章でもイエス・キリストがこの言葉で呼ばれています。人の子のような方はイエス・キリストです。

キリストの手には鋭い鎌があった。鎌は作物を収穫するために使う刃物。三日月状で内側に刃（やいば）が付いているんですね。それでサッと刈り取るんです。

15 すると、別の御使いが神殿から出て来て、雲の上に座っておられる方（キリスト）に大声で叫んだ。「あなたの鎌を送って、刈り取ってください。刈り入れの時が来ましたから。地の穀物は実っています。」

あっさり黙示録で度々申し上げていることは、聖書は字義通りに読む。勝手に他の言葉の意味に置き換えて換骨奪胎（かんこつだつたい）してしまったら、聖書を本当に読んだことにならない。

字義通りに読むー「イエス様、鎌を送ってください。収穫してください。地の穀物は実っています。」だからこれは、キリストに農作業を依頼してるんです。一と読むとダメなんですねえ。それは字義的ではなく、機械的に読んでるんです。字義通りに読むというのは、聖書そのものが意味している意味において理解して読むこと。そして、聖書は基本的に聖書で解釈することが大事です。

キリストに「鎌を送ってください」と呼びかけ、キリストが鎌を送るシーンが既に出ています。

マルコの福音書 4 章

**26 またイエスは言われた。「神の国はこのようなものです。人が地に種を蒔くと、
27 夜昼、寝たり起きたりしているうちに種は芽を出して育ちますが、どのようにしてそうなるのか、その人は知りません。」**

「イエス様はここで、農業の種蒔きのことを言ってるんだ。」いやいや。そんな意味ではないんです。なぜなら、**14 種蒔く人は、みことばを蒔くのです。**

字義通りの解釈と同時に大切なことは、文脈で読むこと。

ここでは、人が神の言葉を伝えていくことを種蒔きになぞらえているんですね。

人が地に種を蒔くというのは、人がこの地上で多くの人々にキリストを、福音を伝えることです。

そうすると、蒔いた人ではなく、蒔かれた種である御言葉の中にいのちが宿っているので、御言葉を受け入れた人の中で内的な変化が起こり出すんですね。
夜昼、寝たり起きたりしているうちに種は芽を出して育ちますが、どのようにしてそうなるのか、その人は知りません。全くそのとおり。

私も今まで色々な方々に福音を伝えて来ました。私が最初に伝えたのは高校のクラスメート。卒業と同時にバイブルキャンプがあって、「君たちも来えへんか。」
4人来てくれましたが、いやー、聞く態度悪かった！「俺らはこんなんと思ってへんかった。別にクリスチャンなりたいと思ってへんし。おまえが誘うから来たけど、面白いこと何もあらへん！」
聖書を一生懸命語ってくれているメッセンジャーの前で、寝てないくせにわざと寝たフリするんです。寝たフリキンチョールや。起きてんねん。けど寝たフリして、語っている人たちの気持ちをへし折ってやろうみたいな。

キャンプが全部終わって最後のお別れ会（シャローム集会）で、マイクを持って一人ずつ感想を言うんです。「感想なんか聞かんでいいのに」と思ったんですけど。
司会の方が「君、どうでしたか？」「もう二度と来ません！」いや、ほんとに悲しかったですねえ。

ところが半年後、しつこくも もう一度誘ってみたら、なんと半年の間に心が変わられてたんですよ。「二度と来ません」と言った彼、キャンプのプレゼントの新約聖書を、「こんなん、いりません！いりません！」言うてたんですが、結局持って帰ったんです。
それが何かのきっかけで読み出して、半年後に再会した時、「ピリピ人への手紙まで読んだ」と言うんですよ。そして、「聖書をもっと知りたい。イエスを心に受け入れたい」と言ったんです。彼は今、奈良の集会の責任者です。

どのようにしてそうなるのか、その人は知りません。アーメン。
なんでコイツにこんなことが起こったのか。私の力じゃない。
神がいのちの御言葉を使って、そのように変化を与えてくださったんですね。
彼は親友です。今でも会えば、その時の話をよくします。「キミでも救われてんから、どんな人にも可能性あるよ！」なんて言い合って。

29 実が熟すと、すぐに鎌を入れます。

これは新改訳聖書 2017 年版です。分かりやすくなるように一生懸命苦労して翻訳して下さったんですが、“鎌を入れます” なんですねえ。直訳は“鎌を送ります”。
紙の聖書の欄外注には「*直訳『送ります』」と書いてあるんです。

“送ります” でないと意味がないんですよ。この表現が先ほどの黙示録 14 章に出て来るからです。つまり、イエスはマルコの福音書 4 章で、黙示録 14 章で起こる“艱難時代におびたしい数の人が救われる” ことを語っているんです。
同じ言葉使いによって読者にそれを悟らせようとしているのに、ここで違った表現にしてしまったら気づかないじゃないですか。ちょっと残念な気がしますね。

それはともかく、もう一度黙示録 14 章。

15 「あなたの鎌を送って、刈り取ってください。刈り入れの時が来ましたから。地の穀物は実っています。」

16 雲の上に座っておられる方（イエス・キリスト）が地上に鎌を投げ入れると、地は刈り取られた。

誰が刈り取られたんですか。実った人たち。

すなわち、福音を聞いて心に受け入れ、信じて救われた人たちです。

救われた人たちがたくさん起こされる。これが艱難時代後半に起こるんですね。

ところで、人が救われること、つまり永遠のいのちを頂くことを、ここでは種蒔き農業のたとえで表していますが、刈り取られたのは蒔いてくれた人がいるからです。

蒔く人は聖書の言葉を伝える人たち。艱難時代においては、主に 144,000 人のユダヤ人たちですね。このユダヤ人伝道者によってキリストを信じた人たちが弟子訓練を受け、彼らもまた宣べ伝える。それを聞いた人たちがキリストを信じて、また他の人たちに宣べ伝える。なので、たった 3 年半という短い期間なのにあっという間に、全世界にいのちの福音、永遠の福音が行き渡るのです。

これは艱難時代だけではなく、今も基本的には同じです。福音は伝えた人によって広まるんですね。伝えないと広まらないと思います。伝えた結果、ある人は信じます。ある人は反発します。反発して「こんなん、いらん！」とか言って拒否しても、それは伝えた人の責任ではありません。神とその人の関係の問題であって、伝えた人が救うんじゃないんです。人を救う力は伝える人の中にはありません。

伝える人の役割はとにかく蒔く。花咲（はなさか）じじいは灰を撒いたが、クリスチャンは恵みの福音を蒔き散らす。それを聞いた人たちは信じる人と信じない人の真っ二つに割れるのですが、それは蒔いた人の責任ではありません。

ただし、福音を伝える時、クリスチャンは注意しなければならないことがあります。正確な福音を語ること。同時に、福音は神様の愛から出ていることを、ぜひ強調していただきたいと思います。

昔読んだ本に、“伝える”と“伝わる”は違うということが色々書いてあったんですね。みんな一生懸命伝えているんです。でも伝わってない。伝わるメッセージは、基本的には相手のことを考えているメッセージだと書いてありました。

例えば、奥さんが体重を気にして「太って来たわあ。」「運動せえへんからや。運動せえ！」これでは運動する気持ちは萎える。でも、こう言ったらどうですか。「夜の散歩、一緒に行かない？」協力してくれることが分かると、やる気が出るんじゃないですか。

あるいは、“芝生に入るな”の看板を見たら入りたくなりますよね。人間て、禁じられたら余計にしたくなるもんですよ。でも、こう書いてあったらどうでしょう。“この芝生に入ると農薬が服に付きます”「俺のこと考えてくれてんの？」「そこに入ったら危害を被るの？」入る人が減るかもしれませんね。

レポートを期日までに出すのが間に合わない時、指導教官に「すみません！もう一日待ってください！」と言っても、「甘ったれんな！自分のさぼりを甘えで解決しようとするな！」
却下される可能性が高いですね。こう言ったらどうでしょう。

「素晴らしい講義でしたので、レポートはハイクオリティなものにしたいと思います。それで、練
るためにもう一日待っていただけませんか。」「三日でもええよ」と言うかもしれませんね。

要は、相手のことを思っている心が届く時に、そのメッセージも届きやすいのです。

聖書の福音ほど、神が人間のことを思って語っているメッセージはないんですね。

ですから、神が一人ひとりをどんなに愛しているかをよく思い巡らし、相手に伝わる言葉に変換し
て、教理的に全く正しい福音を伝えることがとても大事だと思います。

そのために、これからも努力して参ります。

まだキリストを信じていない方、神様ほどあなたを愛している方はいません。

偽りの愛からは偽りの親切が出て来るかもしれませんが、偽りのない愛の心から出た言葉は、本当
にいのちの言葉です。

神様は愛です。あなたの祝福のみを願って、いのちの福音を伝えておられます。

ぜひイエス・キリストを信じてください。心からお勧めします。

次回は 33 回目。7 番目の宣告です。よろしければ、またお付き合い下さい。

チャンネル登録もお願いします。ではまた お目にかかりましょう。

皆さん、お元気でいてください。さよなら！

☆使用した聖書は「聖書 新改訳 2017」です。